松露

川柳句集

松露

句碑建立（平成元年５月）
場所：鳥取県西伯郡緑水湖畔文芸の小径

思い出のアルバム

第１回全山陰川柳大会（昭和24年10月30日　大山）

故小島祝平氏３回忌追悼句会　亀子夫人、
森中恵美子氏を囲んで（昭和29年９月４日）

甲種合格　入営の前日
（昭和17年１月）

松露川柳会　月例の集い
（昭和30年７月）

「川柳多作の夕べ」兼題10、席題６、
計16題　（昭和28年９月）

麻生路郎氏を迎え松露川柳会創立記念山陰川柳大会
（昭和30年３月６日）

◀松露川柳会　月例の集い
（昭和32年10月）

松露月例句会に明和川柳研究会(西宮)▶の薫風、すすむ、三舟、舟遊、満秋の各氏を迎えて
（昭和35年10月16日　米子市公会堂）

川柳松露100号記念全山陰川柳大会（昭和38年５月12日）

妻（鈴枝）と北海道旅行
（平成元年５月）

大山をバックに（平成元年８月）

物故者供養　松露川柳大会で挨拶
（昭和62年11月）

副主幹　黒川紫香氏を囲んで
（第９回茗人忌川柳大会　昭和60年８月）

西尾　栞主幹を囲んで 柳友諸兄と新春おめでとう会
（平成２年１月15日　心斎橋 大成閣）

序　文

山陰の好作家、川柳塔社参事、鳥取県川柳作家協会理事、松露川柳会会長小西雄々さんが今度「松露」という優雅な名の句集を発刊されるその序文を書く欣こびに筆がはずむ。

雄々さんは、昭和二十五年川柳雑誌に初投句して以来、麻生路郎師の薫陶を受けて、昭和三十年故三鴨美笑氏と松露川柳会を創設して月刊誌「松露」を発刊された。そして会員六十有余名のリーダーシップをとられた。

昭和三十三年には山陰日日新聞の柳壇選者。その後、日本海新聞柳壇の選者として活躍。又、平成元年には鳥取県緑水湖畔に「呼び合えば何時も波長の合う夫婦」という句碑も建立していられる。

何しろ柳歴四十有余年という古強者だけに、今迄に何回となく句集刊行を思いたたれたが、その機会を逸して今日に及び、今年古稀を迎えたのをしおに句集発

刊に踏み切られた。柳歴五十年に垂んとする句数は何万句とあるが、この際厳選して約一千句を句集に収めてある。

最初から麻生路郎師の指導を受けられただけに本格的なすくすくと伸びた珠玉の句が並んでいる。私の好きな句を抜粋してみると、

風邪で寝て働き蜂の背が痛む
子沢山誰かの鼻緒切れている
流行に遅れる妻をよしとする
祈祷料はずめば威勢のよい太鼓
蕾でも酒さえあれば手をたたく
丁寧に音痴三番まで唄い
熟年へまだ助走路をかけ回り
美しく着てもマネキン夢がない
流行の服で職安には行かず

日本語で売れず英語に書きなおす
父さんの堪忍袋は疵だらけ
寄せ書へ目立ちたいのが一人いる
蔵の鍵握ると父の咳払い
影武者が時々違うサイン出す
廃止線その後北風吹くばかり
補聴器で嫁のやさしい声を待つ
一寸拾ってみても仲々佳吟が多い。

氏は昭和五十一年国鉄を定年退職して、横辷りで、後藤興業株式会社に入社して輸送課長から取締役を最後に退職して悠々自適の晴耕雨読の最善最高の境涯にあり唯今は、鳥取県生活教育人材バンクの川柳部門の指導者として活躍中である。

川柳の常道を学び、本格川柳に精進せんとされる方はこの句集を座右に於かれることをお勧めしてペンを擱く。

みどりの日

水鶏庵にて

西尾　栞

鮎の香を集めて最終バスは発つ

雄々

年度末　歩を突くように異動させ

新築へ皮肉も混ぜて褒めて去に

欠伸でるほど花束を抱いて待ち

塵だけは余所に負けないほど溜り

風邪で寝て働き蜂の背が痛む

初老とは咳まで亡父に似ておかし

泊り客　米の相場も聞いて発ち

平凡な理想で養子よろこばれ

本当の都合知ってる女秘書

駅長の帽子を子供買えという

子沢山誰かの鼻緒切れている

地図かいてくれたが会社見当らず

金貯めたうわさに塀が高くなり

親子四人炬燵へ座る位置をきめ

招待の隣も借りたモーニング

公園の鯉アベックを見て泳ぎ

母の肩もみ背負われたころ思う

虚無僧の尺八吠える犬も追い

よそよりは高く揚げたい鯉幟

晩婚を気にせずひばりの歌が好き

何か知ら落ちていそうな年の暮れ

所得税　俺もこんなに貰ろたのか

鉄屑のなか動乱の記事を読む

苦労して来たから部下の苦労知る

非常ドアその時説明など読めず

巨人には勝てぬ阪神だから好き

あの人も母が亡いのか淋しい句

アドルムを飲む山の位置かんがえる

サービスはローカル線のせいにされ

思い出の晴れ着が重い離婚の荷

幕あいに隣へ負けぬ折りを開け

流行に遅れる妻をよしとする

別れる気　火鉢をつつきながら聞く

利子までが真綿でしめるように増え

場内の雰囲気　代読から崩れ

人間の欲でたまった古道具

ワイシャツを脱ぎつつ嘘を考える

ロマンスを聞かれ嬉しく否定する

いつからか妻の言葉が母に似る

死の灰のことは知らない鯉のぼり

ジャズ歌うように英語は易すからず

酌をする順番マダム心得る

正直に話し告白めいてくる

税金に泣くとは見えぬ店構え

純潔を説く女医さんはまだ嫁かず

念仏を唱え憎くまれ口減らず

台風へ期待はずれの釘を抜き

人間の屑とはいやな代名詞

転落へ憎い男がいるという

コーヒーへ溶けぬ愛ならあきらめる

沢庵の重石も洗う冬仕度

相談欄ゆずる恋ではないと述べ

背の高い方なら嫁ぐアンケート

密輸品世間はばかる艶を持ち

焼き芋の好きなわが娘も適齢期

清貧に慣れ恩人の背が丸い

酒飲めぬ弱みは見せず黒田節

泣き事を並べ別れるとは言わず

先輩に世間の裏を聞いて飲み

指定席となりも代理来て座り

沖縄の生まれ隣は歌が好き

スクラムに婚期気にせぬ白い腕

株で儲け株で損したスリル聞く

恋人の好きなコースに歩が揃い

折り詰めの位置がきまった鯛の幅

酔いさめて小さな悔いをもつ夜明け

子の知恵を絵本の中に見つけだし

生唾をのみ怪談を信じきり

実るまで守り通した栗のいが

折角の貯金不幸な時に要り

拝観料値上げ仏像知らず座し

容疑者は白か敬語の名に変わり

真相を握りつぶした酒に酔い

本線の貫録　支線またず出る

和服着た看護婦別な声で来る

大物の転勤らしく駅が混み

家出した終着駅に風が舞い

貧乏を忘れるような日本晴れ

新築へ他人は給料まで弾き

祝い酒　音痴の自覚ふと忘れ

散歩していても交通事故に遇い

ふくらんだ予算を聞けば人件費

熱燗に温度計などいらぬ舌

ミレーの絵ふと思い出す野良に佇ち

練習をした定石で攻めてこず

孫の代には役に立つ苗を植え

鬼瓦欠けて落ち目と知る旧家

ロカビリー新興宗教よりさわぎ

手土産を見て一升の封を切り

一票が欲しいお世辞がこそばゆい

母さんに言われぬ人と喫茶店

赤胴が勝って安心した寝顔

民謡を聞けばこころは米どころ

午前二時　男だました服を脱ぐ

水虫は軍隊以来のくされ縁

癌病んでいたに交通事故で死に

座布団も敷かず税吏は法を説き

子供より飼育しやすい夫を連れ

飛び出して見れば霊柩車のパンク

定年の弱気を妻に励まされ

雀より雷族で目をさまし

本籍を言わぬ男に養われ

高塀を洩れるピアノに妬けている

上役をおい中村君の意気で呼び

ヒップだけ去年の田植よりめだち

臨終に間に合うように喪服縫う

二日酔い母にすまない目を閉じる

女医さんは不機嫌と知る注射針

悪知恵を無欲な顔で受付けず

祈祷料はずめば威勢よい太鼓

筆跡を気にし学歴には触れず

会者定離　橋のたもとに虚無の風

生け作り　箸の動きが早くなり

はったりの顔へ破魔矢を放ちたい

ロボットが賃札もって買いに来た

インタビュー衣の下に見た鎧

英雄の耳へジョークが届かない

ひと筋の願いへ揺れる流し雛

毒消しのいらぬ女でよく眠る

妥協する栓を閉めたり緩めたり

バラよりも花瓶の方を褒めておく

蕾でも酒さえあれば手を叩き

模範生家が貧しいから目立ち

プレゼントしたハンカチを尻に敷き

芋蔓を食べた記憶のキノコ雲

遭難へ親を泣かせる雪やまず

弔詞にもテンポがあってもらい泣き

デパートがすめば株屋に寄るプラン

スランプに私生活まで批判され

アベックへ説教しない民主主義

金持てばゴルフでなおる肩の凝り

核実験よりも株価が気にかかり

丁寧に音痴三番まで歌い

お化粧をしても知性がついて来ず

冬山で特攻隊のように死に

退職金弾いていたに頓死をし

深夜喫茶　都会は丑三つ時も寝ず

早乙女の尻へ一礼する候補

屑の値へ買いとる世辞がそらぞらし

投資するように学資を子に送り

健康な乳房がゆれる拭き掃除

映倫のカットが痛い野心作

全快へ下駄の感触なつかしみ

金網に入れた仏像おがまされ

駅長の手袋白し月曜日

大雪というに近所の火事さわぎ

幸福が続く夫の背を流し

親よりも嫁が可愛い世をねたみ

嘘と嘘ネオンの下で手を握り

半分は女給が飲んだ金払う

海苔の香の手で遠足の子を起こし

年頃の笑いヘコケシ倒れそう

腹の底みすかされそうな酌を受け

観光の人出に酔うて母帰る

姉さんの恋なまぬるい化粧する

慰める凧は空から降りてこず

素うどんを食う食堂が今日も混み

芋蔓で身内をつなぐ選挙前

近所にも素顔は見せぬ暮し振り

総入歯とれば口もと祖父に似る

ライバルに勝たねばならぬプレゼント

ボーナスと言わず餅代くれという

自動車に轢かれるよりは寝正月

山の宿　上座は熊の皮を敷き

遭難へ山は神秘と言うとれず

神聖という労働に貧富の差

プライドがあり上品に西瓜食う

文学の疲れを語るゴルフ場

貧しさを励まし合ってベターハーフ

ベテランが見れば小癪なニューフェース

松露採る皆生の浜へ老妓来る

雄々

独学へ誘惑の灯の多いこと

わが子より若い巡査に叱られる

信仰をすすめる方もまだ癒えず

口先きと違い見舞いに来てくれず

朧夜というに救急車が走り

無理をした若さを叱る聴診器

迷惑をかけ円満にスト妥結

ベッドから見れば金魚はよく動き

紅一点五黄の寅でたじろかず

金策に行くとは見えぬ羽田発

弟子が剃り二度と行きたくない理髪

全盛へ牛乳風呂でみがく肌

庶民また天声人語に共鳴し

賃上げのときは闘志をみなぎらせ

不景気へ街も鎧戸おろす店

老舗まで多角経営して稼ぎ

保険屋に近所の頓死知らされる

振り向かぬ後姿へまた妬ける

キリストの教えを破るプラン練る

母逝く

天寿とはいえど悲しい骨ひろう

管理者の笑顔能面つけたよう

死にぎわが良いと頓死をうらやまれ

桐下駄の感触うれしい齢となり

仕手株の動き血圧にもさわり

すぐ済んで癌と違うか胃の手術

不景気へ年中ホステス募集中

栄転の荷は荷造り屋にもわかり

恋たのし彼女は射程距離にあり

助骨も胃も切り近頃痔が痛み

不機嫌へ飼犬までも寄りつかず

年金の暮しを乱す慶弔費

一日を大切にする髭を剃り

誘っても着ていくものが無いという

買物へ妻からメモを渡される

軍隊を知らない挙手で意が通じ

お茶席でお嫁にほしい娘にみとれ

もう一度泣けと柩の蓋をとり

長男　結婚

祝福をされる門出に菊薫る

一合の酒では出せぬ安来節

パトロンを変えても景気よくならず

観光のコースにぽっくり寺も入れ

目をとおすメニューへ急かすように立ち

妻今日も重荷に耐える灸をすえ

迷惑をされてる方が頭さげ

庭園を褒め結構な茶をよばれ

獲物より撒き餌の海老が高くつき

栄転の机大きくなって見え

初孫　誕生

やわらかい冬陽が孫の頬を染め

病状を深く聞かぬも礼のうち

亀に負けそうな記録で人生路

岩風呂の湯気へ女神のシルエット

傷口は疼き示談はまとまらず

読みとれぬから達筆にしておこう

政治にも紫頭巾でてほしい

お世辞ほど訪ねてみたがもてなさず

照明が暗くなるほど高いバー

家貧しされど孝子をあてにせず

擬装するつもりはないがアデランス

内科外科泌尿器科まで世話になり

小会社も生きねばならず交際費

条件へ手の鳴る方へ顔むける

風紋へ母も知らない人を連れ

家計簿の範囲でファミリーレストラン

逃げ道の地図は見せない父の愛

老人が増えると困るような記事

女かなし離別の海へ背を向ける

シグナルへ手を上げる子の瞳を信じ

他人の目　日日好日のようにいう

無駄飯は食わぬつもりで管理職

保護色に染めた頃から自我が消え

熟年へまだ助走路をかけ回り

不景気へペットの美容院は混み

パックから盛った料理でもてなされ

中流の意識へ息切れなど見せず

癒えるため気にはかけない灸のあと

独走とわかっていても選挙カー

黄砂舞う異国の丘を忘れかね

お世辞背に聞き流しつつ靴すべり

生涯を閉じれば同じ壺の中

大山が雄々しく見えるお正月

バーの名を変えても客が寄りつかず

勝闘は一度もあげず古稀迎え

美しく着てもマネキン夢がない

タイミング考え馬も蹴るかまえ

人情にもろく端役を繰り返す

大ジョッキ女かなしい虚勢張る

バカンスへ地図はどうでもよい若さ

六法が味方をしない日のショック

楢山の紅葉は見ないことにする

如月の風に触れたい墓参する

宝船つくと巷の風荒れる

蛇口から聞こえる春のセレナーデ

控え目に平均寿命生きる欲

骨拾うわけにはいかぬ人を恋う

頼りない男にパーマよく似合い

断ち切れぬ輪廻に草の根も乾く

国力の差を知りつくし鮭泳ぐ

鼻風邪に明日も働く軍手干す

鍬だこになじまぬクラブ振り無心

頂点に登って気付く四面楚歌

学歴へスタートラインが違いすぎ

夏に耐えエリート歩幅みださない

革命の血は吸わせたくない畳

歩兵銃だけは譲って欲しくない

雁首を並べただけの多数決

妥協する距離考えて風に佇つ

目標へ戦陣訓に似た社訓

夕立へ薬師如来の壺満ちる

老兵のいのち食うだけあればよし

破ってもローンのチラシまた届き

忍従の頃を大樹は語らない

減反を背なで聞きつつ励む野良

知恵の輪が政治の倫理では解けず

背信へ自戒のねじも緩みがち

たどりつく平均寿命へ一思案

来賓へ相槌打てぬ血が憎い

勲章もメダルもいらぬ汗の詩

国宝の埃取るにも金が要り

ロボットもやがては花に手を叩く

再会へ弾まぬ毬になっていた

古傷の疼く演歌に雲いそぐ

腕みがく他人の飯へ瞳がこわい

心まで着せる思いで編む毛糸

ホールインワン欲張らずマイペース

余生なおゲートボールで食すすむ

ライバルを蹴落せ桃は熟れてゆく

誘われて金は男が払うもの

十戒を背負って雪に耐える竹

喪の帯へ涙はすぐに乾かない

外車には道ゆずります国産車

母逝って歳月早し沈丁花

アイバンク光りを残す判を押す

姑よりペットへ優しい声をかけ

ハンカチの汚れに触れず自伝書く

天に矢を射ってなだめる地の呪い

一粒のダイヤへ鬼と手をつなぐ

流行の服で職安には行かず

エリートの印象　流氷きしむ音

残り酒あつめ温みのある助言

減税も響かず子等は食べざかり

陽を閉ざす日本海へ雪やまず

逆探知される電話はまだ掛けず

遺伝子へ神にそむいてメス入れる

孫　男子誕生

鯉のぼり三十五年目に泳ぐ

ロボットを中心にした社の施策

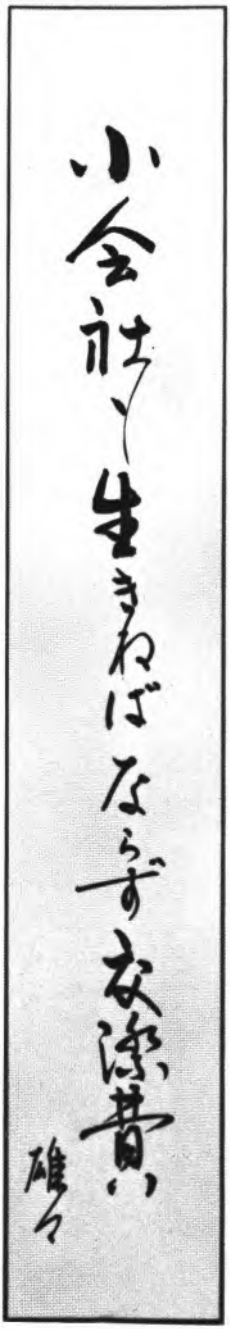
肩書の大きい方へ村雀

盛っただけ食えず吐息のバイキング

ドライブへ貧乏県とわかる道

揺れ動く心は見せぬ床柱

お隣も金庫を買って近づけぬ


小会社も生きねばならず衣添貴
雄々

オープンの粗品へ鬼の手仏の手

遅れても許す気でいる花時計

満月へ急にふくらむ母性愛

大切な命へ四季が早すぎる

告白をする公園で聖書抱く

言い訳を勘進帳より長く述べ

踏切りに来て馬車馬も一呼吸

癌に勝つ日を信じてる知恵袋

お隣もローンで建てた隙間風

七人の敵には見せぬ左遷の荷

ふる里を恋うフイルムを巻きもどす

臨終を囲み打算の目がけわし

長生きへ守るしつけが多すぎる

自画像へ入歯は見せぬことにする

心電図深いしこりが一つある

勢いは本家を抜かぬことにする

乱れても如来の顔は汚すまい

亡父　三回忌

亡父の忌へ梨は糖度を増す日照り

ゲートボール若さに負けぬ風の中

仮面から突然もれたプロフィール

敬遠のボールも来ない日のあせり

B面で紳士かみしも脱いで飲み

民話聞く秋茄子うまし燗がつき

舟舵を妻にまかすと凪となる

祝杯のビールで髭は濡らされぬ

止り木で味方にしたい訛り聞く

仏飯を供えて誓う薄あかり

三世代住んでときどき櫓がきしむ

編棒をせかす大山雪だより

笑わない人が笑って野火はしる

遺言のしこり喪の帯きつく締め

反骨の味方貧しい顔が寄る

手許には何時も仮面の二つ三つ

文化にも功罪があり使い捨て

父に似た鼻へ期待が重すぎる

煙草屋の娘に惚れた良き時代

信ずれば極楽からも匂う風

楢山へ来てからしこりなど忘れ

大脳の皺ものび切るほど甘え

貨車走る挽歌を合唱するように

豪勢な門松たてて炎の吐息

花便り友一人逝き風が舞う

亡母の忌が巡るとやがて花だより

夫よりペットの世話に気が疲れ

首縦に振り波立てず喪があける

ダメージは息子に負けた腕相撲

罪悪のように肥満を指摘され

勝つ事を覚え人間らしくなる

活性化ねがう太鼓が鳴り止まぬ

世渡りが下手で手荷物ばかり増え

一蓮托生妻はゆっくりすればよい

ライバルへジョーク出るほど差を広げ

陰膳で祈ってくれた母も逝き

隣組以来の仲も代替り

弥陀の掌へ暑い話はよしましょう

雑草の芽もアメリカを向いて伸び

着飾って心の隙をのぞかせず

ててなし子人魚が生んで海荒れる

宮仕え背中で呼吸ととのえる

二三日臨終が延びみな無口

一幕のコントがすめば別れよう

だまし絵の中でまたたく首飾り

日本語で売れず英語に書きなおす

タクト振る妻のリズムに逆らわぬ

石積んでみても来世は霧の中

浴衣着た娘に匂う女の香

ジゲ起こす祭もすんで秋の風

販売機情けを知らぬ釣りを出し

楢山で息の長さを語り合う

胸の炎を覗いてほしい冬蛍

くちびるへ大器とわかる呱呱の声

父の海　底はのぞかぬ方がよい

埋れ火へ急ぐでないと風の私語

車間距離つめると疼く膝がしら

近くから励ます妻に絵を描こう

バラ色の老後へ杖は濡らされぬ

言い勝って雪の白さへ慙愧する

腎臓をもらうつもりでいる同志

安楽死かならずできる本を読む

寸志なら闇でいただくことにする

若僧と思えどプロの水およぐ

赤坂のドラマへ動く永田町

うしろ指ささせてならず父の塔

古里に湖があり美味い飯

白鳥は約束通り北帰行

長生きへ荷物になると言わせまい

耳鳴りの底から神の声を聞く

小粒でも父の背いつか越す自信

地下街へ夕焼け小焼けの歌がない

QアンドAで印象たしかめる

外野から他人勝手なことを言う

家族よりお金のかかる猫を飼い

父さんの堪忍袋は疵だらけ

尾を振らぬ人間不信の犬が増え

薬草が効くまで待てぬつむじ風

ハンカチで時には赤い涙拭く

あといくら花見できるか余命表

金持ちという日本の隅に生き

サスペンスばかりを追って森へ行く

遠花火　男のだまし言葉聞く

函数を開き疑い深くなる

妻よりも淡谷のり子が若く見え

胃カメラに保証をされた屠蘇の味

七度二分ひと息ついた夜が白み

一椀の芋粥うまし小雪舞う

くちびるへ飲みつくせない海がある

人生の重荷に耐えた甲羅干す

千羽目の鶴に希望の陽を貰う

水に浮く卵に情けかけられぬ

カロリーは目刺でとって古書を読む

公認の愛を白磁の皿に盛る

口火切るのが善人で責められぬ

霧晴れるまで根回しを繰り返す

古稀近し同居すすめる子が一人

カラオケは下手でも皮下の血は若い

槍の雨降らせたい日もある妬心

哀史聞く流人の涙吸った砂

雑魚なりの努力を評価してほしい

震度三　別れ話が煮つまらぬ

売られゆく牛は一度も振り向かぬ

モナリザの笑みを婦警からもらう

オバタリアンの濶歩を責めるのはよそう

波高い日も多かった夫婦地図

マナーにも自信をもってフルコース

約束へ熟柿が一つ落ちてきた

マスコミへ刃向かう火薬しめりがち

登るより下山の心配する与作

境界でもめる杭にも赤トンボ

楽しさについアクセルをふかしすぎ

禁断の実を懐に歩く秋

八月の悲劇わすれぬ凍魚の目

金魚鉢一撓の旗は見当らぬ

崖のぼる男の眉が素晴しい

耐えること多い余生の灯が揺れる

父母の血を受けた細胞責められぬ

真心を貧しい人の掌でもらう

寄書へ目立ちたいのが一人いる

手ぶらでは行けぬ思案へ鰯雲

ふる里は空気がうまい雁の列

株高へ男の向う傷絶えず

普段着に着替えて女羽根たたむ

間食をすすめるようなコマーシャル

母昇天日本海は白い波

奇形魚が歴史の裏を訴える

砂丘では馬に乗りたくなる少女

妖精も交じる豪華な毛皮ショー

干されても自我は曲げない葱坊主

生きている証拠七草粥すする

茶断ちして二十一世紀へ残れるか

白壁が落ちても誇り持つ本家

判定はボール素直に修羅を行く

償いの掌にも熱砂は照り返す

妥協案けって一枚岩となる

野辺送りすむと彩づく冬苺

火吹竹　母の指紋は拭ききれぬ

蔵の鍵にぎると父の咳払い

思い出は千人針へ佇った橋

天皇も風邪気味と聞く今朝の霜

補聴器へ人の情けが吹き溜る

ささやかな野心も秘めて待つ異動

将来も自由席では困ります

学歴を比較するから嫌な椅子

善玉を集め仏の貌になる

葬式のうしろでダウの話など

迷路でも軌道はずれぬ父の貨車

甘えると母が開いてくれる傘

婦警から見ればピエロが多すぎる

ライバルの方へ向日葵むきたがる

モナリザも苦笑する日が来るだろう

人ばらいする相談へロバの耳

年金の蒼しを乱す慶平黄
雄々

腰痛へ部品交換してみたい

家族からやがて他人の舟を漕ぐ

お人好し褒めると安来節唄う

村おこししてもふるさと無人駅

芯朽ちて明日はわが身の二重童子

秘密など持たず朝日と語り合う

集合に遅れ運よく生き残り

上客へ生簀の鯛は跳ねてみせ

水甕へ自責点だけよく溜り

隠し持つ火種へ脈はあるという

見ぬふりもする公園のパトロール

逆光へ思慕のあせりを見抜かれる

人間が怖くて闇を迂回する

保身術暑いゴルフのお伴する

てきぱきと葬儀屋動き嫌われる

母の樹の下で素直に話し合う

履き捨ての靴へ世相も干涸らびる

消費税に小銭が拗ねるときもある

献体をきめた日首も軽くなる

折り返し地点でもらう思いやり

かまぼこの鯛が見上げるシャンデリア

お隣へ負けない背伸びごっこする

農家でもどうにもならぬ米離れ

虹色の余生に警報ベルが鳴る

深鍋に愛を煮つめて五十年

甲羅干すためにハワイへ翔びました

甘えたい心はみせず髪を梳く

父の樹がちょっと傾く微積分

祈るほど阿弥陀如来の涼しい瞳

影武者がときどき違うサイン出す

五百羅漢の中から亡父の顔さがす

返り血のとどかぬ位置で策を練る

会者定離いつか止まった花時計

絵にかけば神話明るい彩になる

夢を生む種がときどき欲しくなる

サービスのおまけが森に置いてある

初夢が思い出せない歯を磨く

忍と苦を拾い羅漢の中にいる

驚いた瞳が素晴らしい好きな人

神経性胃炎で溝を飛びこせぬ

陽の匂い吸わせた布団　姑へ敷く

マネキンも驚く高級品が売れ

着飾って心の痛む飢えがある

泥水をかぶる覚悟の位置で耐え

塩辛い水も承知の名幹事

スイッチオン突然春の訃が届く

子の彩にいつしか溶けてわらべ唄

鳳仙花はじけて海が見たくなる

廃止線その後北風吹くばかり

あの世でも歌える歌を覚えたい

雑学へ自信の風船ふくらます

感謝状妻に出したい訳がある

長寿国浮いた話が多すぎる

もう逢えぬ予感へ寒い駅に佇つ

大漁の鰯の匂ふ路地を抜け

欠点へ針の穴から攻めてくる

人情を入れる鞄は別に持つ

牛の尻叩いた頃の土も痩せ

蛸壺に寝ていた隙を責められる

銀行へ目立たぬ鞄提げていく

刃こぼれの男へなつく猫もいる

酔眼へ男のいくさなど見えぬ

流し雛浮く幸せを信じきる

銀越えて記念日金へ届きそう

貴婦人の帽子が妻に似合わない

居酒屋の主役へ味方して貧し

百分の一秒競い孤独感

他人には拍手をさせぬ鶴を折る

ドル高へ眉くもらせる端株もつ

蔵の隅にときどき振ってきた反旗

行くあてはないが喜劇を見て歩く

海が荒れると遊ぶ玩具が欲しくなる

憧れの山があるからまた登る

フロンガスは宇宙の誤算かもしれぬ

働き蜂の財布を一度のぞきたい

木守柿へ明日を約束する夕陽

弱点を責められ奥歯痛くなる

天国に着いて道化の服を脱ぐ

駄馬なりに果せぬ夢を抱きつづけ

正論へドンキホーテも駆けつける

別れても情けは残る冬木立

矢印は無くても逢える道を行く

賽翁が馬のたとえで福を待つ

クリアした塀へかたつむりの自戒

海へ出る水は静かに罪を消す

雪は愛　童話のポスト眠くなる

福つかむまでの男にあるいくさ

春の夜へ江戸川乱歩読みあきる

黒バラを愛し片意地押し通す

老人が増え病院は吹き溜り

春闘の妥結しらずにさくら散る

横顔へ嘘を言ったと書いてある

首を洗って出直す席が見当らぬ

カルチャーで脳細胞をふくらます

人の死のけじめで臓器移植もめ

一銭五厘のハガキ知ってる鴉鳴く

雁首を並べて罪はありません

補聴器で嫁のやさしい声を待つ

エデンから逃げた男はもう追わぬ

戒名へ無理をしたなと香を焚く

かけ込み寺の鐘の余韻へ迷いさめ

真相はあの世で語るリクルート

知恵のある枝の主張に負けておく

点滴のリズムに乗って満を持す

冗談が過ぎて背中に傷を負う

よそ行きの言葉へ肩が凝ってくる

世渡りへ嘘詰めかえる箱を選る

貴公子という横顔へ夜叉が棲む

内緒にはできぬと水子くりかえす

代議士の椅子に座ると眠くなる

近道がいつか茨の道になり

葬式の花輪ならべるにも序列

餞別を度々もらい渡り鳥

火を抱いた強気へ神も扉を開ける

さすらいの風駅前で向きを変え

しこりまた残し投票箱しまう

得意顔すると見えない矢が刺さる

たちむかう運へ男は風を切る

宿敵へ仮面を作る業の森

目に青葉いつまで続く万歩計

逆風のたびに結び目固くなる

屋台からのどかな顔で男出る

小走りに煮豆が隣から届き

出世欲傾むく木には近寄らぬ

押して引くことも覚えた処世術

勝ち負けは水に流せと日が暮れる

美しく老いたい派手な彩にする

血統書つきの猫なら貰わない

髪形を変えて綺麗な星を待つ

毒舌も人気の一つ台詞書く

スマイルへお礼の語尾が続かない

六尺の褌めだたぬように干す

生かされたお礼に温い飯を炊く

羽根布団　鳥の恩情には触れず

天才と脳細胞が違うだけ

未来図を見つめあせらぬ蝸牛

腹立てぬ心の隅へ曼珠沙華

善人が踊る笛なら吹くつもり

後悔を末期の水へ二つ三つ

臆病で真面目な雑誌売れ残る

標的の最短距離に辞典置く

商品を絵皿に盛ると愚痴が出る

胃の底へ逢いたい人の名刺もつ

森に帰った鴉に聞いたハプニング

憲法の平和へ小指との誓い

思い出の森に轍が深くなる

葬送曲だけで悪書は消されない

告白は素焼きの壺へ詰められぬ

雑巾で足を拭くほど遊ばない

姑から習う家風へ波立てず

偏差値を少しちぢめたリゾート化

耐えることばかりで母の樹をゆする

気兼ねなく火照ってみたいレモンティー

すんなりと相手の凧が風に乗る

作戦を変えて飴玉なめさせる

頭数で他人の遺産割ってみる

ある日ふと妻の敬語にうろたえる

新しいいのち冷凍から覚める

賽コロを喜劇の森でころがそう

紛争の種を戦車で踏みつぶす

黄梅へ故事来歴は語るまい

求愛へ鶴は火の舞い繰り返す

早春へ走りたくなる藁の馬

雑兵のポーズ己を見失なう

立て髪をなでて励ます駄馬を飼う

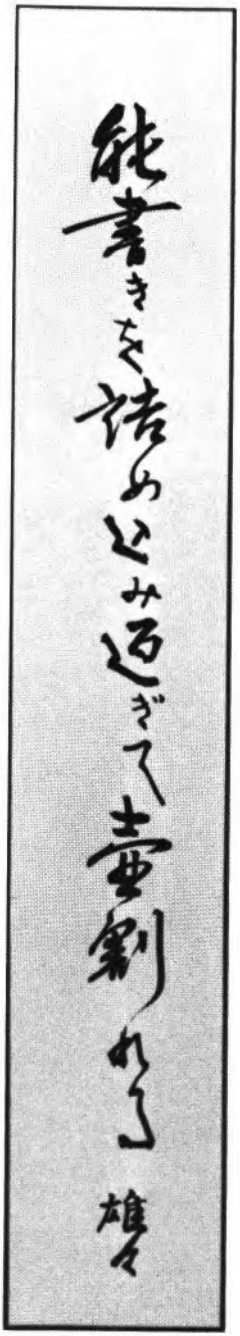
保護色に塗っても甘くない世間

能書きを詰め込み過ぎて壺割れる

てきぱきと母がほどいたもつれ糸

香典も本家の八分目に決める

ジャンケンポン手の内読んでいた笑顔


能書きを詰めじみ返ぎて壷割れる
雄々

指切りげんまん一会の風に騙し合う

当っても黙っていよう宝くじ

中流の意識で揺れる父の旗

なまぬるい風がきらいな冬の凧

路地裏に評判どおり温い風

先客の残した菓子でもてなされ

鴉にも笑われた日の慨悔の譜

食べるだけ食べて胃薬飲んでいる

だまし絵の中から寒い風が吹く

寒気団居座り湯豆腐が美味い

神様と握手した手は洗わない

のびのびと柩の中で寝てやろう

時効がきて艶とりもどす寒椿

ライバルの趣味へおじけておられない

母性愛秘めた毛糸を編み急ぐ

業を煮る妬心も煮たい鍋さがす

二つ三つ砂丘へ嘘を埋めに行く

満開の梅へときどき亡父の声

水面下で物価が上を向きたがる

シナリオが平凡すぎて嫁が来ぬ

ほのぼのと煮え大根の愛しきり

了見の狭さを凧に見おろされ

パンの耳捨てて孤独が溜る朝

ひいふうみい趣味を数える妻若し

目の毒といわれる方へ向きたがり

ロボットに決断させた方がよい

ゴルフ場の芝にだまされないように

楢山へ行かせるヒント嫁が出す

万華鏡の視野で論議をせぬように

北風と対話の鬼へ愚をさとす

世渡りへ許して欲しい百の嘘

バラ一輪コップで思案して暮れる

紀子さんの表情に見る鶴の舞い

千円を上手に使う市場篭

悪友へ祝儀を包む義理がある

情報を巾着網でのがさない

スピーチへ新語辞典も引いて行き

せせらぎの春の序曲へわさびの芽

太陽の温さほしがる冬トマト

早や死にをルール破りのように言う

実印を押した墨書へ血の雫

添え木して育てた松が喋り出す

谷底を覗き百鬼の罪ゆるす

尾を振って向い風にはさからわぬ

囲炉裏とろとろ母の情けにあまんじる

伸びる芽を過保護で向きを変えたがり

スパイスを一振り愛へ効かせたい

耳底へ水子の声と手毬唄

忘れたい噂へ重い傘たたむ

花束へ聞かせたくない労働歌

正攻法で七つの矢にも立ち向かう

オブラートに嘘と嫉妬の火を包む

四島を手土産で来いゴルバチョフ

胸の炎で僕も刺されたことがある

関係を否定されても火が匂う

許されぬ画布をはみ出す思慕を抱く

こころ寒い部屋百本のバラ飾る

ドル稼ぐ梨に育てた太い指

プロフィール大きいことを言いなさる

息づいて掌から逃げたい冬蛍

言い訳へ本音は伏せた日の自虐

決断へ男は息を乱さない

税の愚痴ためて絵筆が弾まない

月と歩くと影が私を抜きたがる

亡母の影ゆれる花吹雪を見つめ

象の目に戦争ごっこ多すぎる

負け癖を水平線に嗤われる

隠す気はないが家風をのぞかせず

門松の前にも募金箱が待ち

手許には呆けないための本を積む

風化した手柄を軍手忘れない

気持だけ伝えて消えた雪女

カルチャーへ毛並みの良さの語を探す

死ぬ順が狂い御神火まで狂う

口答えできぬ立場で磨く芸

思い出を盆提灯へ投げ掛ける

盃を伏せて作戦には乗らぬ

しなやかな指で鎖につながれる

親指がお人好しでは困ります

米櫃を満たし忘れていた祈り

無理みんな聞き病人へ逆らわぬ

野心もつ五臓六腑を見透かされ

賑やかなお通夜へ遺徳しのばれる

内祝い兎小屋にも絵が満ちる

ノートルダムの鐘も知ってるパスポート

北風の向きを変えたい寡婦の意地

手料理を褒め腰すえて飲みはじめ

気の弱い鬼へヒントが通じない

とんび舞うふるさと遠く汽車が出る

水玉のネクタイ結ぶ天邪鬼

ストレスを物見遊山して消そう

表情と違う心を覗かれる

人ひとり許しハミング忘れない

逃げ口上述べてお米を作らせぬ

闇の部屋で神を信じ過ぎないか

すり鉢の溝で女の業へらす

梨の木をゆすり後継者を探す

耐えてきた言葉を喉の奥に溜め

猿真似の芸へ二三度木から墜ち

劣性遺伝を痩せ馬信じてはいない

金ためる本をこっそり読んでいる

芽吹く日をかたく信じて祝辞読む

刺客には疑い深いドアチェーン

疑心暗鬼許す言葉が出てこない

風の吹く巷の悲劇ばかり聞く

心電図までも乱れた男泣き

芸術の目で裸婦像を見るゆとり

失恋のほころびを縫う旅へ出る

札束を積まれてプロへ向きを変え

骨抜きにする寸鉄の言葉選る

正直に批評はしないピカソの絵

フィニッシュは何にしようか定年期

過疎すてぬ子へ嫁が来た祝い歌

グルメにもリズム狂わす血糖値

妥協案蹴って反骨独り寝る

十字星　窓から見てた戦中詩

友情を愛にはさせぬ冬いちご

実年の鎧が重くなる夕陽

ロボットに勝った自慢はまだ聞かぬ

パチンコに負ける姿は子に見せぬ

長すぎる寒さへ訃報今日も来る

胸に棲む鬼と一緒に春を待つ

合格へ大きい夢を書く日記

嫁よりも弱い姑が増えてきた

節約をすると近頃笑われる

二度三度ポックリ寺へ来た長寿

介錯を頼める友とパズル解く

すぐ翔べる便利へ夜道見失ない

修身を脳細胞に言い聞かす

外される梯子心配して登る

円高へ損せぬように泳ぐ知恵

同情をこばみ頑張る未来地図

傷心の肩にも青葉艶を増し

病む窓へ迷いほたるが一つ飛び

口先へ相槌打って聞き上手

心まで見せぬ会釈へ背を向ける

さそり座の女へ過去は話すまい

釣り落しまたアカンベーして逃げる

栄転の靴音うれし柿も熟れ

理想追う毬をけっても弾まない

喧嘩にはならず遮断機降りてくる

お隣の犬がなじまぬ賢夫人

意地少し曲げたいような酌を受け

二次会は万才三唱せず別れ

波風をたてるお嫁の荷がとどき

晩年に人がうらやむ陽が当り

石畳　歌ほどロマン湧いてこず

生涯を端株のように扱われ

食い逃げをされては困るプレゼント

雑用へ今日もちぎり絵つなぐよう

理想とは別に目減りをする暮し

修羅の風ぬけて気ままなシャボン玉

ひとしずく残すと瓶が喋りだす

義理堅い母を素直な瞳で見つめ

愛冷えて急に活字が重くなる

豪快に笑い心をのぞかせず

自尊心すてて輝く二番星

揚げ足をとると硝子が曇りだす

逆境の仲間の棘を抜いてやり

出しすぎた勇気へ不味い朝の飯

欲望の靴を洗えば生臭い

手鏡に仮面の出来をたしかめる

人並みに幸せの灯を守りぬき

解決を金で見積るからもめる

バキューム車臭い都市化へまだ遠し

益軒の教えも添えて見舞状

経文も聖書も読んでまだ迷い

自治会がもめ表彰が一人増え

世渡りへ百面相の背が淋し

駄馬の苦へ性善説を疑わず

飽食へ天の裁きがこわくなる

厄年へ新たにねじを巻き直す

どんぐりの囁きを聞く森の奥

減塩の半端な味に馴れて癒え

粒らしく墓標へ小さく名を刻む

ポストから神が下さる藁一本

ストレスを溜めて河童の皿渇く

結ばれぬ恋へ噂が派手すぎる

居眠りで聞いても法話ありがたい

プリズムで覗くと春の陽が喋る

陽に溶けるつららへ妥協するつもり

逆風へ世間の臭いかぎわける

パンチパーマの男を冷凍魚が見つめ

喝采とファイトを積んだ舟に乗る

雑音に耳かたむけず忍一字

一粒の砂の主張を重く聞く

去年からいちご大福もう買わぬ

ロボットに武士道までは教えない

出稼ぎの父へ正月はやく来い

コメ輸入せよと寝首を掻きに来る

メルヘンの星へ童話の馬で行く

愛少し残し遊んだ風を追う

控え目に選挙は八分目で弾き

終焉に養老の滝呑みほそう

水の思慕火の思慕吐息かくせない

すぐそこにある幸せに届きかね

ジョークなら遠い彼女へ届くだろ

恋人に逃げられペット飼いならす

返り血を洗った池でほたる哭く

マスコミのさわぐ恋ならしてみたい

鴉まで愛鳥週間知っていた

鈍行に乗り換え古希を生きぬかん

披露宴　晴れ着の値踏みされていた

奇形魚へ波が伝えてくる挽歌

お手植の稲も陛下の身を案じ

暦から挽歌は奏でさせないぞ

逆も真　晴れを信じる雨男

燃える血で男を縛るいのち絵図

祈る背の方で聞こえてくる呪文

コケシにも踊る手足が欲しくなる

シグナルの赤ながすぎる母危篤

先祖には済まぬグルメの生け作り

がらくたを捨てると広い部屋になる

充電のつもりときどき昼寝する

泥舟に甘えて乗った日の不覚

スランプの悩みを白い皿に盛る

喪が明けるまで急かれても踊らない

金力ヘファイトも勝てぬときがある

ゲートルを巻いて粗末にした生命

団交の裏で芝居ができていた

民宿の儲け時計がボーンと鳴る

花道を過ぎると冬の音がする

胸底へ追えない人の愛を断つ

気まぐれな夜風と語る春帽子

人生へ損はなかった回り道

脱税もできずに折れた矢を拾う

ふくらんだ夢を拳の中に溜め

紙コップ温い話を聞きたがる

無責任な抱負は海へ捨ててくる

泣きぐせの髪を洗って春を待つ

アダムとイヴの遊んだ池で首洗う

ほのぼのと働き蜂の私語を聞く

峰打ちを物価にしたいときもある

幸せが続き妬心の目がこわい

総選挙すんでみそぎを終えた顔

続編へ他人に見せぬ錆びたペン

肩書きがとれても低くならぬ腰

飛ぶ鳥も落していたに二度童子

気休めの占いの灯へ迷わされ

冬眠の耳底に響く春の音

絵に描いた餅がふくらむまで待とう

粘っても千手観音向き変えぬ

ロバの耳はげしく動くハプニング

真ん中で思案はつきぬヤジロベー

恋知った胸に木馬が来て止まる

飛んだ過去みな焙り出し罪を消す

情け知るポーズへ鬼面ずり落ちる

ペットにも履かせてみたい靴すべり

喜びへ少し無口に春を待つ

慰める方もおんなじ過去を持つ

喪の明けたポーズで抱くは炎かも

保険屋に狙われたまま頓死をし

池を濁してどこかにひそむテロリスト

丼鉢を叩く味方を信じきる

ゼスチャーも大きくピエロ自己欺瞞

本心を伏せて一つの転機待つ

ジャンケンポンあいこのように続く恋

マイホーム主義を見習うかたつむり

ロボットと仲よくしたい入社式

招かれた傘から落ちる罪拾う

知恵袋　癌に勝つ日を信じきる

婿入りへ手乗りのインコにはならぬ

憎しみが渇く招きへ急がねば

ふくらんだ笑い袋を嫁にやり

プライドがふくらむたびに火が匂う

和解する部屋へ一刷毛彩を足す

賞罰もなく耐えぬいてきた裸

火に向う若気を煽るつむじ風

気休めにお灸も一つすえておく

神木の呼吸もわかる蛇となる

戸主という鎖で家を守りぬく

序列からポイと抜け出す道さがす

懐をさぐる笑顔を見逃さぬ

人情と妥協をしない賽を振る

右折しても左折をしても苦が続く

お悔みを述べて狙った椅子がある

二浪の子へ家族は音をたてず住む

終点で思い出せない人に会い

長命を慶ばれてもこそばゆい

はずかしさ忘れ遺産へ競い合う

毛タンポポ飛びたい意志を忘れない

煩悩を忘れた顔で除夜の鐘

葬式が三つ続いた歳の暮れ

招かれて脚色された幕が開く

家風に耐え嫁がくつろぐ二十五時

ベレー帽虚無の世間が好きらしい

招かれたネオンの下は汚れすぎ

点滅信号に人の情けを言い聞かす

春の譜へ掛け軸を替え窓みがく

さすらいの旅を木馬もしたかろう

先祖代々大きい葛篭に目を向ける

ペットまで家族にかぞえ独り住む

慶弔費ばかりを増やす春の風

腹芸も使い荒海およぎきる

ハミングの妻へジョークを投げてみる

消燈のラッパへ泣いた過去がある

ペレストロイカを案じて渡り鳥帰る

棒グラフ伸ばす厳しいノルマ追う

順風に乗る日を待った一行詩

夫婦舟気楽に漕がしてはくれず

転落の詩集に触れぬ本籍地

後厄の自重へ欲得ない歩幅

口裏を合わせて覗く火消壺

子に頼る将来ばかり女郎花

御詠歌に声を揃えて燃えている

民宿で人魚が酌をしてくれた

与作にも謎は解けない森の精

泣きに行く古里で待つお月様

止り木のグループだから息が合う

成人へ浴衣も男臭くなり

幸せも写してほしい水たまり

二枚舌もつ横顔が憎めない

遠吠えの時代もあったわがドラマ

背信のシナリオ水ですすぎたい

幸せをつなぐコンセントを探す

折り鶴も舞って励ます入社式

誇りもつ金貨は愚痴を語らない

招待へはっきりしたい句読点

懐に切り札いれてから招く

千円の温み忘れた世をなげく

不整脈つづき近頃人嫌い

狙われていたとは知らぬ白羽の矢

裏道においしい餌が落ちていた

四季忘れ咲く花があり蝶は病む

ハイカラな奥さんがいるベレー帽

はずかしいから深爪の訳言わぬ

余震まだ続く家族を守らねば

頂点を狙う二の矢は見せられぬ

お土産の心配もして駅を発ち

青竹を踏む音　父の日を迎え

火も水も飲みつながりの箸洗う

試験管で育てた過去に触れさせぬ

結び目を解いてきめたい老後策

付加価値をつけて育てる水をやり

献血を終え牛乳で気を静め

折れた矢を砂丘で拾うサスペンス

お茶ぐらいと誘ってからの仲と聞く

振り切って出たと思えぬUターン

手切れ金かんがえながら膝枕

お喋りの石がむくむく起きあがる

あとがき

昭和二十四年に川柳作句を初めてから、四十年を過ぎましたが、柳友諸兄に支えられ今日まで作句を続けたことを、何より幸せに思っています。

当時は食料事情も悪く、娯楽といってもラジオを聞き、たまに映画へ行く程度でしたが、趣味としての〝川柳〟との出会いで、生活に潤を抱き、毎月一回の例会が楽しみで、待ち遠しかったことを覚えています。

さて、句集を発刊してみたいと思ったのは、国鉄を定年退職した昭和五十一年でしたが、退職した翌日から乞われて第二の勤務につき、新しい仕事と取り組んでいるうちに時期を失してしまいました。

次は、四年後の還暦を迎えた昭和五十五年で、家族も支援してくれ、その気になっていましたが、機会を逃してしまいました。

その後は毎年、元旦を迎える度に「今年こそ句集を」と心に誓いながら十年経

過し、今年は古稀を迎えてしまいました。

このままでは一生、句集の出版はできないと心に言い聞かせ、奮起しようやく漕ぎつけることができました。

およそ壱千句を自選してまとめてみました。故麻生路郎先生に川柳の基礎を教えていただき「生命ある句を作れ」の言葉をモットーに、今日まできましたが、作品の未熟さを反省しています。

しかし、その一つ一つの句は、過ぎ去った毎日の生活のすべてであり、詩であり、夢を与えてくれたものばかりで、反芻しています。

私の川柳生活には、川柳雑誌・川柳塔の線と、川柳松露の線があり、この二本のレールに乗って、たとえ速度は遅くても故障や脱線もなく安全運転を続け、句集発刊に到達することができました。こうした考えから句集の題名は「松露」と決めました。

〝松露〟とは、毎年四、五月ころ海辺の松林にはえる球形の〝きのこ〟の事で

子供の頃これを採って遊んだ日を思い出します。

序文は川柳塔社主幹の西尾栞先生にいただき、大変光栄に存じます。

また、題字は中原汲香さんにお願いし、ご揮毫をいただき、有難うございました。

師・柳友諸兄から、私の計画に対し励ましのお言葉をいただき、大変勇気づけられました。また、妻と息子夫婦もいろいろ応援してくれました。

句集「松露」の出版を一つの節目として、一歩ずつ足元を見つめながら、更に前進したいと存じます。

今後ともよろしくお願いいたします。

鈍行に乗り換え古稀を生き抜かん
後押してくれる友あり有り難し

平成二年　夏

小西雄々

略歴

本名　小西忠夫

雅号　雄々

大正十年一月	米子市に生まれる
昭和二十四年三月	川柳作句をはじめる
昭和二十八年十月	川柳雑誌社不朽洞会員
昭和三十三年四月	山陰日日新聞柳壇選者
昭和三十三年四月	松露川柳会　会長
昭和四十年十月	川柳塔社同人
昭和五十二年十月	鳥取県川柳作家協会理事
昭和五十三年四月	いずも川柳会同人
平成元年五月	新日本海新聞柳壇選者
平成二年一月	川柳塔まつえ同人

川柳句集「松　露」

平成二年八月十五日印刷
平成二年九月　一　日発行

発行者　小　西　雄　々
〒六八九―四二
鳥取県日野郡溝口町溝口七五七―三
電　話（〇八五九）六二―一五二〇

印刷所　巧　印　刷
〒六八〇
鳥取県鳥取市秋里板建一九七
電　話（〇八五七）二四―六二八八